家康と磐田

発行·編集 磐田市教育委員会文化財課

静岡県磐田市見付 3678-1 TFI 0538-32-9699

日赤松家記念館

明王堂跡

行泉寺

寺跡

永禄11年(1568年)、三河から遠江に進出した家康は、遠江の中心だった見付を手中に収めるため、新 城の計画や、人心掌握のための様々な工作を行いました。見付の住人たちも家康に従い、荷駄の移動など の軍務に参加し、遠江の支配に協力しました。

家康は浜松を居城としましたが、見付をはじめとする市内各所に何度も足を運び、多くの足跡や伝説を残 しています。中泉には宿泊の拠点となる中泉御殿を置き、東海道の往来には必ず立ち寄っています。

江戸時代の見付宿

■ 宣光寺の釣鐘

宣光寺の釣鐘は地蔵菩薩のため徳川家康が寄進したもの で、鐘の胴部には「大旦那 源家康」と天正 15年 (1587年) の銘文があります。釣鐘には家康のほか、鋳造に関わった 見付の住人である藤原孫藤吉、小工藤原久次、鍛冶大工久 吉の名も見られます。



宣光寺の釣鐘

宣光寺の釣鐘(拡大)



市指定文化財



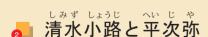
「家康」の銘

源

家

画 酒井の太鼓

三方原で敗れ浜松城へ逃げ帰った酒井 忠次は、城門を開け、櫓門の太鼓を打ち 鳴らし、味方の帰城を助けたと伝えられ ています。これが「酒井の太鼓」です。 明治維新後、見付の有力者の手にわたり、 見付学校落成を機に、学校へ寄贈されま した。「伝酒井之太鼓」として磐田市の 文化財に指定され旧見付学校に展示され ています。



苗字帯刀が許された安間平次弥 は上村清兵衛とともに家康を助け ました。平次弥の屋敷からは、清 水が流れており、家康は休息のた め度々、この地に訪ねてきたと伝 えられています。屋敷があった小 路を、「清水小路」と呼んでいます。



酒井の太鼓

見付宿

矢奈比売神社

平安時代以降に国府が置かれた見付は、政治・経済の中心、交通の要衝(宿) として栄える一方、戦国時代には町人による自治も行われました。見付に慶長 6年(1601年)に徳川家から「伝馬朱印状(てんましゅいんじょう)」が発行 され、正式な宿場として認められ、近世の東海道の宿場町として発展すること どなりました。天保 14 年 (1843 年) には 3935 人、戸数 1029 軒、本陣2軒、脇 本陣1軒、旅籠56軒で、東海道でも大きい宿の一つでした。見付宿には、東海 道に通じる小路があり、それぞれの道を「○○小路(しょうじ)」と呼んでいます。



見付宿宛「伝馬朱印状」

■ 見付端城と大見寺

室町時代の守護の居館が置かれた見付端 城(見付城とも呼ばれる。現在の見付交流 センター付近)は、その後も見付支配の拠 点となりました。家康が見付に進出した際、 見付端城は廃止され、跡地は家康により大 見寺に寄進されました。大見寺境内には土 塁が残されています。



見付端城(大見寺絵図)



見付の街並み(大正時代



見付の街並み(現在)

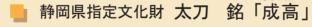
なかいずみ ご てん ● 中泉御殿 ―徳川家康の別荘―

中泉御殿は、将軍の旅行や外出の際の宿泊・休憩施設と して全国に 90 箇所ほど設けられた御殿のひとつです。元々 は軍事的な施設で、関ケ原の戦いの時にも立ち寄っていま す。

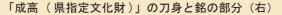
『遠州中泉古城記』(1823 年)によると、家臣の伊奈忠次 に命じて天正 12~15年(1584~88年)に御殿を築きました。 御殿の敷地は約一万坪と伝えられ、絵図等によると、敷地 の北側に土塁と水堀を築き、南側は湿地に臨む要害の地で ありました。

~御殿・二之宮遺跡 発掘調査~

中泉御殿を含む御殿・二之宮遺跡は弥生時代~平安時代・ 中世に営まれ、奈良時代には遠江国府の中心施設が配置さ れた重要な遺跡です。平成 15~ 16 年度に調査が行われ、 中泉御殿の土塁や堀のほかに、塀跡や門跡など中心域の遺 構が発見されました。発見された門は、間口 3.6mの大型 の薬医門です。また、通常の門は柱を礎石の上に置きますが、 本例は柱を直接地面に埋め込んだ掘立柱式の門です。



見付宿の住人「上村清兵衛」は家康を助けたことから、 家康から名刀「成高」を授けられました。この名刀は 鎌倉時代初めに、備前国(今の岡山県)の名工・成高 が鍛えた作品で、弓の名手として知られた那須与一の 刀(重要文化財)など6点しか伝わっていない貴重な ものです。家康が遠江に進攻した際、多くの見付の町 人たちが徳川方に協力しました。家康はこの恩に報い るため、「上村清兵衛」など見付の有力者に礼をしたも のと考えられます。





中泉御殿の門出土状態

家康を助けた人々

「帯金」の姓 (上本郷)

敗走する家康に、帯にしまっていた 銭を渡したことから姓をもらった。

「左口」の姓(中野戸)

敗走する家康の馬を曵いたことから 姓をもらった。

「竿指」の姓(池田)

| |敗走する家康に助け船を出したこと から姓をもらった。

「半場」の姓(池田)

徳川方の兵士を運んだことから、家 康から姓をもらった。

しのぎ村(大藤)

大藤地区に伝わる。敗走する家康か (大軍に)凌ぎならん」と詠んだ。

気 賀(気賀)

徳川・武田の戦いの際、怪我人がたくさ ん出たため、「けが」と呼ぶようになった

三国堤 (池田)

家康が命じて造られた堤防。池田を 水害から守った。

船かくし池(池田)

浜松へと逃げ帰る家康を助けた船を隠 したと伝えられる池。現存していない。

一言観音(智恩斎 一言)

敗走する家康が勝利を祈願した観音様。

宣光寺の釣鐘(見付)

家康が寄進した釣鐘。「源家康」の銘がある。

E方ヶ原の戦いの際、浜松城で打ち鳴 らした。旧見付学校に保管されている。

西光寺(中泉御殿表門 見付 中泉御殿の表門を山門として移築した。

西願寺(中泉御殿裏門 中泉

中泉御殿の裏門を山門として移築した。

東照宮(府八幡宮 中泉)

市八幡宮境内にある。かつては中泉陣屋 で祀っていたもので、明治に移された。 祭事には御殿地区の人たちがあたる。

中泉寺 (中泉)

鷹狩りの途中、家康が訪れ茶の湯を 楽しんだと伝えられる。

中泉陣屋門(新島

中泉陣屋の表門を明治の頃移築した

常楽寺本堂(堀之内)

中泉御殿書院を移したと伝えられる。

掛塚湊(掛塚)

永禄 12 年 掛川城政防で家康に負 けた今川氏真が伊豆へ逃れた。

開山の源誉大僧正は家康の信頼が厚 かったと伝えられる。

当時の住職が、阿弥陀仏をもって徳川 武田の戦いの死者の亡霊を供養した。

権現の森(白羽)

元亀年間、武田方に出会った家康か 隠れた森。白羽神社西にあった。

掛塚に逃れた広忠(掛塚)

家康の父、松平広忠が掛塚に逃れ、 +郎島の鍛冶五郎の家に隠れた。

家康と磐田

「蓑」の姓(中野)

「土井」の姓(大原)

ほめられ、名乗ることを許された。

鷹狩りに来た家康から、家の土塁を

もらった。

敗走する家康を助けたことから姓を

徳川・武田 戦いの舞台(城館)

城之崎城 (城之崎)

徳川家康の命によって築城されたが 戦略上の理由から中止された。

匂坂城(匂坂上·中)

恵川方に属した匂坂氏が拠点とした き。信玄の二俣城侵攻の際に落城した

向笠城(向笠竹之内)

向笠氏の拠点。武田方の砦として築力 れたが、徳川方によって落城した。

加茂砦 (加茂)

徳川方に属した平野重定の屋敷。信玄 侵攻の際、砦として整備された。

社山城 (社山)

徳川・武田の戦いの舞台。現在も土 塁等が残る。市指定の史跡。

合代嶋の砦(合代嶋)

文献に見られる砦。信玄が陣を置い たと言われるが正確な位置は不明。

亀井戸城 (亀井戸)

築城等の年代は不明。信玄の二俣城侵 攻の際の陣が置かれたと考えられる。

市内に伝わる徳川・武田の合戦場

三加野坂の戦い (三ヶ野) 袋井市木原に陣を置いた武田方と、

偵察に来た徳川方との戦い。

一言坂の戦い(一言)

浜松に引きあげる徳川方と、それを **追撃する武田方との戦い。**

物見の松(三ヶ野)

徳川方の武将・本名平八郎が木原に 陣を置いた武田方を偵察した大松。

三加野台 (三ヶ野)

徳川方の砦があった。見晴らしが良い ことから「のろし場」としても使われた

鎌田神明宮(鎌田)

駿府在城の家康より、100 石の御朱 印と武具・鏡を賜った。現在は社宝 として伝わっている。

医王寺 (鎌田)

武田方によって焼き討ちされたが 家康の発願によって復興する。

明音寺(山椒寺 鎌田

鎌田の西尾家に隠れていた家康が明音 寺に立ち寄り、山椒の佃煮を所望した

草刈の舟 (軽池)

蛭池の安間家で、逃げ帰る家康を草刈 中に隠した。

お助け榎(西之島)

些げ帰る家康を蓑の中に隠した。その 持濡れた家康の着物を榎で乾かした。

薬師堂(蛭池)

徳川・武田の戦いの際、焼失した

拝領の茶臼(五十子)

市蔵新田(大原

家康のご落胤?と言われる鈴木市蔵

-本松(五十子)

逃げる家康が大松の穴に隠れ、持っ

ていた貴重品を埋めたと伝えられる。

が開墾した新田。

塵狩りの際、八木家に立ち寄った家 康は、お礼として茶臼を贈った。

加藤家 (豊浜中野)

徳川・武田の戦いの際、家康は加藤 家でひと休みした。

きのさき 城之崎城

家康は、永禄 12 年(1569 年)から城之崎(現在の城山球場周辺)に城を築き始めました。しかし、東から攻め てくる武田軍に対し天竜川を背にするということで、翌年には築城途中で造営を中止し、浜松城を本拠地としまし た。球場の周囲には、土塁の一部が残っています。



現在の城山球場(城之崎城跡)と見付の町並み



御殿の門(西光寺・西願寺)

中泉御殿廃止後、表門は西光寺の表門として、 裏門は西願寺の表門としてそれぞれ移築された と伝えられています。ともに屋根の中心線より 前に本柱を据えた薬医門です。いずれも市指定 文化財です。

西光寺の表門(中泉御殿表門)は3間1戸で 柱間の距離3.45mを、西願寺表門(中泉御殿裏門) は1間1戸で柱間の距離2.9mを計ります。



中泉御殿表門(西光寺 表門)



中泉御殿裏門(西願寺 表門)

🚰 家康と磐田 ~ 一言坂の合戦と本多平八郎忠勝~



本多平八郎一言坂合戦図(林 大功 画)



天竜川御難戦之図

「天竜川御難戦図」「最後の浮世絵師」と呼ばれた月岡 芳年が明治7年に、天竜川沿いでの家康と武田方との 戦いを描いた浮世絵です。一言坂など天竜川流域各所 で徳川方は苦戦し、三方原の戦いをむかえます。

元亀3年(1572年)、三方原の戦いに先立ち、遠江の各所で徳川家康と武田信玄の戦 いが行われました。袋井市の木原に本陣を置いた武田方と三ヶ野に偵察に出た徳川方と の間でも、小競り合いが行われました。その後、浜松へ撤退する徳川方とそれを追撃す る武田方とが一言坂で戦火を交えました。この戦いを「一言坂の合戦」と呼んでいます。

一言坂の合戦では家康の家臣本多平八郎忠勝が奮戦し、武田方の進軍を防ぎました。 このときの平八郎の活躍は武田方にも称賛され、信玄の近習が「家康に過ぎたる物は二 つあり。唐の頭に本多平八」と落書したと伝えられています。

「本多平八郎一言坂合戦図」 図案家とし宝塚歌劇団の舞台装飾も手がけた林大功の作品 です。林は従軍画家としてかぶと塚公園にあった中部第 129 部隊に在隊し、平八郎の伝 承を聞いてこの絵を描き上げました。



一言坂の戦跡 石碑